

三上 智文（埋蔵文化財センター 学芸員）

はじめに

令和 5 年 1 月 23 日から 7 月 17 日までの期間、北代縄文館においてミニ企画展「大石棒展」を開催している。本展では、最大幅が 10 cm 以上となる大型石棒⁽¹⁾について、富山市内出土の 6 点を展示している。この展示品の中で 3 点⁽²⁾は、これまで石材同定がなされていなかった。

本稿では市内では資料数が多くない大型石棒について、新たに石材同定を行ってデータの蓄積を図ったうえ、石材について若干の考古学的考察を行う。なお、石材の同定は富山市科学博物館の増淵佳子主査学芸員に依頼した。方法は肉眼観察による⁽³⁾。

1 石材同定を行った石棒（表 1・写真 1～4・図 4）

表 1 が石材同定を行った石棒で、各資料の概要は以下のとおりである。石棒形状の記述は小島論文 1976・1986 に基づく。

(1) 妙川寺遺跡採集石棒

妙川寺遺跡で採集されたと伝わる。石材は凝灰質砂岩である。全体形状の一端をコブ状に加工した「単頭石棒」である。頭部に鐙形状の他に 2 段目鐙の下部に半円隆帯が掘り出され、これを挟み込んで V 字状の隆帯が配される。反対面にも同文様があるので V 字隆帯は側面で連結し、ここには隆帯の小円が置かれている。縄文中期である（小島 1986）。富山市内で確認できる最長の石棒である。先端部は欠損している。

(2) 春日遺跡採集石棒（亀田コレクション）

亀田正夫氏が春日遺跡で採集し、平成 16 年に本市に寄贈された石棒である。石材は凝灰質砂岩である。「印刻文や隆帯文などを持たず、上端部に鐙を巡らせている」（小島 1976・1986）形状に類似する。縄文中期と思われる。

(3) 北代遺跡採集石棒（栗山コレクション）

栗山邦二氏が生前、北代遺跡で採集され、本市に寄贈された石棒である。石材は凝灰岩である。「先端部に鐙が一本めぐらせ、上端部に円柱あるいは臼状の頭部を作り出す」（小島 1976）形状に類似している。縄文中期と思われる。

(4) 推定文珠寺稗田遺跡採集石棒（栗山コレクション）

富山市考古資料館所蔵の「栗山コレクション」資料である。「栗山コレクション目録」（富山市考古資料館 1987）掲載の「出土地不明石棒」7 点のうちの 1 点であるが、筆者は文珠寺稗田遺跡採集の石棒と推定する⁽⁴⁾。石材は凝灰岩⁽⁵⁾である。

2 富山県内の石棒石材について

以上のとおり、今回同定を行った大型石棒の石材は、凝灰質砂岩 2 点、凝灰岩 2 点である。凝灰岩や凝灰質砂岩は、一般に安山岩等の火成岩と比較して軟質で加工しやすい傾向がある（田中ほか 2002）⁽⁶⁾。

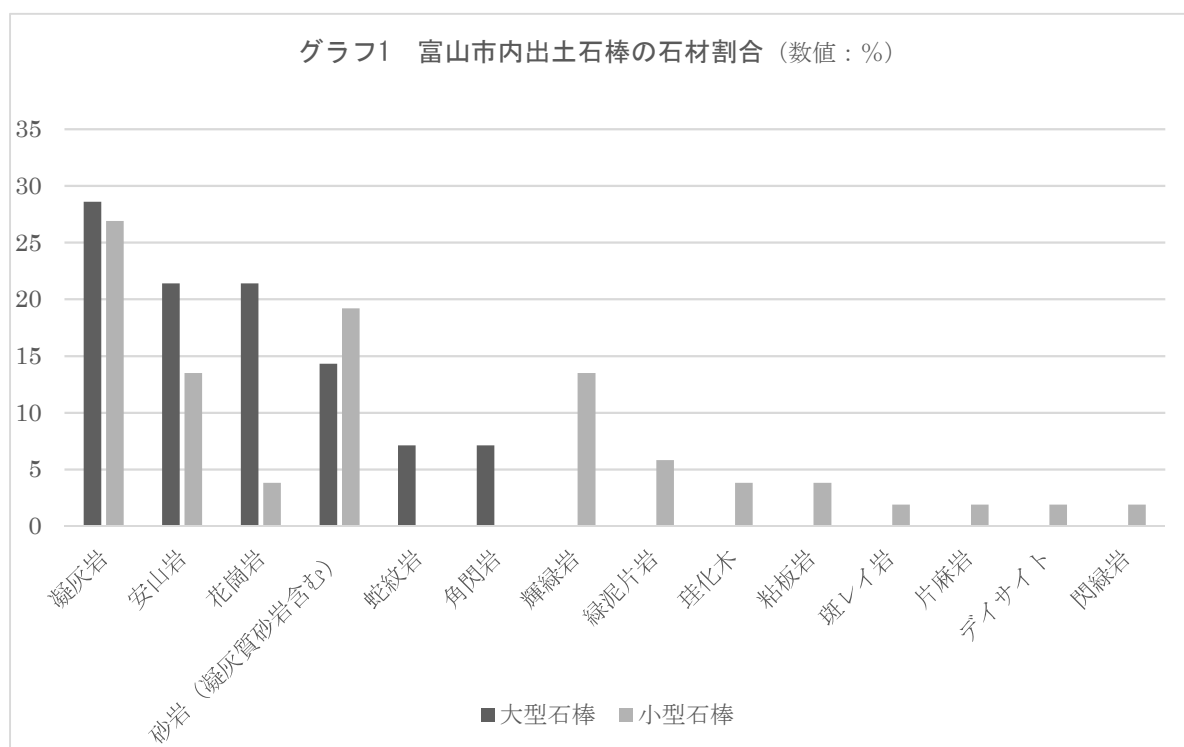
大型石棒の石材の使用傾向をみるため、富山市内で確認されている石棒の石材について検討してみた。今回同定したものを含め、幅 10cm 以上の大型石棒で石材が判明する例は 14 点あり、その石材の内訳は、凝灰岩 4 点（28.6%）、花崗岩・安山岩各 3 点（21.4%）凝灰質砂岩 2 点（14.3%）、蛇紋岩・角閃岩各 1 点（7.1%）である（グラフ 1）。

それに対して、幅 10cm 未満の石棒（グラフ 1 では便宜的に「小型石棒」とする）は計 52 点あり、石材の内訳は、凝灰岩 14 点（26.9%）、砂岩 10 点（19.2%）、輝緑岩・安山岩（花切遺跡出土石棒⁽⁷⁾⁽⁸⁾）を含む（参考資料 写真 5・図 5）各 7 点（13.5%）、緑泥片岩 3 点（5.8%）、花崗岩・珪化木・粘板岩各 2 点（3.8%）、斑レイ岩・片麻岩・デイサイト・閃緑岩各 1 点（1.9%）となる。石棒の大小によって、明瞭な石材の使い分けは認めにくい、大型石棒は凝灰岩、安山岩、花崗岩、砂岩が多く用いられている。

一方、157 点の石棒が確認されている朝日町境 A 遺跡では、大・中型石棒⁽⁹⁾ は砂岩・安山岩・凝灰岩などが多く、小型石棒は泥岩、粘板岩、砂質泥岩等、粒子の細かい堆積岩が多いことが指摘されている（富山県教委 1990）。なお、境 A 遺跡では粘板岩の比率が富山市内出土石棒と比較して高い。これは境 A 遺跡において縄文後期以降出現する粘板岩製石刀の出土とも関連すると思われる。

表 1 対象石棒観察表（カッコは残存値）

	遺 跡	石 材	長さ cm	幅 Cm	厚さ cm	重量 kg	種類	状態
1	妙川寺遺跡か	凝灰質砂岩	(94.0)	15.0	12.0	25.5	単頭	先端部 欠損
2	春日遺跡	凝灰質砂岩	(45.0)	(17.0)	(15.0)	16.1	—	頭部 残存
3	北代遺跡	凝灰岩	(20.0)	(13.0)	(12.5)	3.6	—	頭部 残存
4	推定文珠寺稗田 遺跡	凝灰岩 ⁽⁵⁾	(19.0)	(13.0)	(13.0)	2.9	—	頭部 残存



3 まとめ

今回 4 点ではあるが大型石棒の石材を同定し、県内の石棒の使用石材も検討した。富山市内で確認された石棒については、その大小によって石材の明瞭な使い分けは認めにくい。ただし、凝灰岩や砂岩といった堆積岩と、緻密で堅牢な安山岩や花崗岩などの火成岩が比較的多く使われているという傾向がある。この理由については、安山岩・花崗岩など一般的に硬い石材については大きく作る分、折れにくい石材である必要があること、一方で凝灰岩や砂岩は加工しやすさを重視したためと考えられる。しかし、凝灰岩や砂岩については、

大きく作る分、もろいという欠点を補うため径を太くする必要があったのではなかろうか。凝灰岩・砂岩と安山岩・花崗岩が大型石棒に使われているのは、「凝灰岩類や火成岩を用いて 30cm を超える石棒とするには必然的に最大幅 10cm 以上と太くならざるを得ない」（長田 2020）。という指摘を裏付ける傾向と考えられる。

境 A 遺跡では、大・中型石棒に砂岩・安山岩・凝灰岩が多く使われるという傾向が指摘されているとおり、石棒の大小によってある程度の石材の使い分けをしていた可能性がある。富山市内出土の石棒ではこうした傾向は認めにくかったが、遺跡や小地域ごとに分析することで何らかの違いが見えてくるかもしれない⁽¹⁰⁾。

今回、石材同定を行っていただいた増淵佳子氏のおかげで、本稿をまとめることができた。末筆ながら深く感謝申し上げます。

注

- (1) 長田友也氏が便宜的な基準として示した最大幅 10cm 以上を本稿でも大型石棒として扱う（長田 2013）。
- (2) この 3 点に、筆者が文珠寺稗田遺跡と推定する石棒 1 点を加えた計 4 点を対象とした。
- (3) 麻柄一志氏は、報告書における石材の記述において、調査担当者が自分の知識の範囲内で特定している場合と地質学や岩石学の専門家に鑑定を依頼している場合とではその精度・信頼度に大きな差があると指摘している（麻柄 2020）。
- (4) 小島論文 1976 の「表 1 加越能飛中期の石棒一覧表」に、栗山邦二氏の所有資料として、「大山町稗田」の石棒（No.35：縄文中期）が挙げられている。ここに掲載されている実測図が本資料と形状が類似していることから、文珠寺稗田遺跡と推定した。
- (5) 小島論文 1976・1986 では、石材は「安山岩」とされている。
- (6) 凝灰岩と凝灰質砂岩の硬さ比較については、同じ堆積岩類のため、古い地層ほど硬くなる傾向がある。したがって、一概にどちらが硬いとは言えない。また、砂岩も同様である。ただし、安山岩・花崗岩といった火成岩は凝灰岩と比較すると硬い（増淵氏のご教示による）。
- (7) 平成 9～10 年の町道栗巣野 2 号線改良工事に伴う花切遺跡発掘調査時に出土した縄文中期中葉後半の石棒（大山町教委 1999）。本石棒の石材同定も増淵佳子氏にいただいた。先端部しか残存せず、大型石棒かどうか判断できなかったため、本展では取り上げなかった。ここでは小型石棒として分類した。
- (8) 先端部に包有岩あり。増淵佳子氏のご教示によると、包有岩とは溶岩中に取り込まれた別の火成岩（マグマ）であり、発生割合としては 1～2 割程度で、一般的に見られる現象である。
- (9) 境 A 遺跡では、体部径 70 mm までを小型、130 mm までを中型、それ以上を大型とされている。
- (10) 今回、石材産出地までの特定はしていない。一般論として、富山県内では凝灰岩・凝灰質砂岩は入手しやすく、安山岩は富山県の東西にて産出される。一方で、粘板岩については富山県内では産出されない（増淵氏のご教示による）。石材産出地の特定は今後の課題である。

参考文献

- 大沢野町史編さん委員会 2005『大沢野町史』 pp. 41 - 42
- 大山町教育委員会 1999『富山県大山町花切遺跡発掘調査概要—大山町埋蔵文化財調査報告 9—』
- 長田友也 2013「石棒の形式学的検討」『縄文時代』第 24 号 縄文時代文化研究会 pp. 33 - 57
- 長田友也 2020「IV. 縄文石器の研究 5 信仰に関する石器の変遷 4 石剣・石刀（刀剣型石製品）」『考古調査ハンドブック 20 縄文石器提要』ニューサイエンス社 pp. 118 - 121
- 小島俊彰 1976「加越能飛における縄文中期の石棒」『金沢美術工芸大学学報』第 20 号 pp. 35 - 56
- 小島俊彰 1986「鏝をもつ縄文中期の大型石棒」『大境』第 10 号 富山考古学会 pp. 25 - 40
- 田中琢・佐原真 2002『日本考古学事典』三省堂
- 富山県教育委員会 1990『北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編 5—境 A 遺跡石器編』
- 富山市教育委員会 2007『縄文人の精神文化—富山市出土の石棒と石冠展—』解説リーフレット
- 富山市考古資料館 1987『栗山コレクション目録』
- 富山市考古資料館 2017『栗山コレクション目録 II』
- 麻柄一志 2020「V. 縄文石器の変遷 6 北陸地方」『縄文調査ハンドブック 20 縄文石器提要』ニューサイエンス社 pp. 414 - 431



V字隆帯部



先端欠損部

写真1 妙川寺か（筆者撮影）



写真2 春日
（出典：大沢野町史 2005）



写真3 北代
（出典：富山市考古 2017）

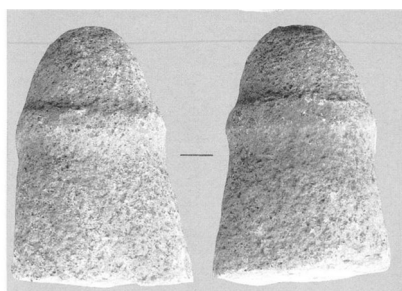


写真4 文珠寺稗田か
（出典：富山市考古資料館 1987）

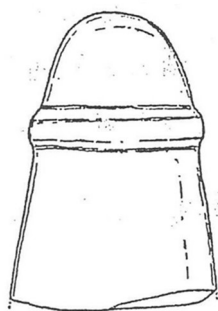


図4 文珠寺稗田か
（出典：小島 1976）

<参考資料> (7) (8)

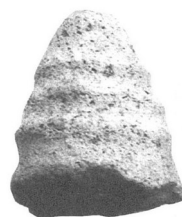


写真5 花切
（出典：大山町教委 1999）

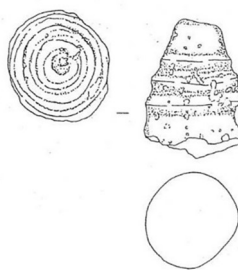


図5 花切
（出典：富山市教委 2007）

図は縮尺 1/4。写真は縮尺不同